ヒロシマが教えてくれたもの。

'00 市内中学生広島非核平和研修

平和の尊さを学んでもらおうと、市が行っている広島非核平和研修も今年で９回目。市内の中学生９人が８月５日から７日までの３日間、平和祈念式典への参列や平和記念資料館の見学などをしてきました。中学生たちは55年前に原爆が投下されたヒロシマで、何を感じ学んだのか。各校代表の５人の感想をご紹介します。

気持ちを考えること

新飯田中学校　小林優美

私は広島へ行った三日間で、とても大きく貴重な体験をしました。特に広島平和記念館での見学や実際に被爆した松原さんの話からは大切なことを学びました。松原さんが目から大粒の涙を流している姿は、今でも目に焼き付いて離れません。原爆が投下された瞬間、市内中心部は火の海となり、約五キロメートルの範囲はすべて全焼したそうです。とても残酷な当時の光景が目に浮かびました。しかし、そんな状況を覆したものが、現在の広島です。

戦後から現代に至る五十年もの間に、広島は美しい建物が立ち並び、たくさんの木々に囲まれ、自然のたくさんある街に生まれ変わっていました。私はそんな美しい広島を見て、二度と核兵器などを造ってはいけないと思いました。造るのは人間です。そして、壊すのも人間です。また五十年前のような被害者が出てしまうのなら、今のこの世の中に核兵器など必要ありません。

私はこの三日間を通して、被爆した人がどんな思いで私たちに語ってくれているのかを、真剣に考えなければならないと思いました。思い出したくないような、人に話したくないような思い出もたくさんあるはずです。「平和」という言葉をむやみに使ってはいけないと思いました。本当の平和はこれからの二十一世紀を生きる私たちが、築いていかなければなりません。そのためにも、原爆について一人ひとりがよく知る必要があります。そして私も、何らかの形で社会に貢献していきたいです。

広島の姿、私に伝えられること

臼井中学校　小林絵梨子

広島での三日間は、原爆を知らない私にとって、受け止めることのすべてが大きなショックの連続でした。原爆ドーム、平和公園の面影、資料館の生々しい被害品の傷跡に被爆者の教えてくれた実際の体験。どれもが私の想像をはるかに超えていた悲惨で残酷なことばかりでした。

今は緑と水と慰霊碑が立ち並び、人々があふれる平和公園。五十五年前の夏、雲一つない青空に直径二百八十メートルの火の玉が現れ、一瞬にして辺り一面を真っ黒に変えました。三千度にも上がった気温の中では、鉄も石も人間さえも抵抗できずに溶けてしまったそうです。どれほど熱いかは、毎日平穏に過ごす私にとって、全く想像できません。実際に溶けてしまった服や石、かわらなどは沸騰した跡が残っていました。ほかにも、自分の形見として残した少年のつめや亡くなってしまった子どもの三輪車…。私にはどれもがつらく感じられました。

原爆がもたらした一瞬が、これほどまでに人々と街を変えてしまうのか。何の意味があって戦争を起こし、見知らぬ家族までも殺してしまうのか。私の知らなかった世界が頭の中でいっぱいになりました。生き残った被爆者は「失った家族や友人の分まで、戦争の結果を若者に伝えることで核廃絶を願う」と言っていました。

私たちはあの日の光景を被爆者から聞いただけで、実際に体験していないけれど、これから減っていく被爆者の代わりに、その光景を次世代に伝えていく義務があるのだと思います。世界が戦争の恐ろしさを忘れないために、原爆がもたらした現実をかすませないためにも私は身近な人に伝えていき、多くの人が平和を願えるように、これから自分のできることから始めていきたいと思います。

上段左から鷲尾大輔さん・二階堂香瑠さん・渡辺佐代さん（北中）中段左から小林絵梨子さん（臼井中）、小林優美さん（新飯田中）、田巻梢さん（庄瀬中）下段左から長崎朗子さん・小林未佳さん・伊藤孝朗さん（一中）

広島に行って

庄瀬中学校　田巻梢

私は今回の広島派遣に参加して、普段の生活では、体験できないことを見て聞いて学んで来ることができました。

広島は緑が多く、「本当に五十五年前に原爆が投下されたのだろうか」と思うほどの美しい街でした。広島市の橋や道、至る所に「平和」という文字が刻まれており、普段私たちが言っている「平和」とは、何だか違っているような気がしました。それは、一つ一つに重みがあるように感じました。

平和記念公園を歩いていると多くの人たちの「戦争反対」「核兵器廃絶」「世界の平和」を訴える姿がありました。私たちはそこで、「新世代を生きる人たちの笑顔の写真を撮っている」というおじさんに会いました。その人は昨日、川を見ていたおじいさんから聞いた話をしてくれました。「お前さんたちは、そのころを知らないから、笑ってこの川を見ていられるんだ。その時は、全身にやけどを負ったたくさんの人が浮かんでいた」と。私には、想像することもできない世界でした。

広島にあるたくさんの緑には、「平和の尊さ」を強く願う当時の人たちの気持ちが込められていたのではないかと思います。この緑を見ていると、絶対に戦争をしてはいけないという気持ちになります。一瞬で多くの命を消してしまう原爆が二度と使われることがないように、核兵器が全世界から消える日が一日でも早く来て欲しいと思います。

原爆が投下された夏から五十五年、今でも原爆症に悩む人はたくさんいます。体の傷だけではなく、心の傷も大きく残っているのだと思います。思い出すのもつらい当時の体験を、涙ながらに語ってくれた松原さんの勇気を無駄にしないためにも、私たちのできることは、できるだけ多くの人に伝えていくことだと思います。

平和の尊さを感じて

白根北中学校　渡辺佐代

皆さんは、日ごろ当たり前のようにある青い空、さわやかな風、豊かな自然、自分が何不自由なく生きていられることをどう感じていますか。私は広島研修から帰ってきて、以前よりも強く、今自分が生きていられることを幸せに感じています。

初めて見た原爆ドームは、テレビで何回も見ていたこともあり、「これが原爆ドームか」と思う程度でしか考えられませんでした。しかし、それは平和記念資料館を見てから百八十度変わり、現代に戦争の悲惨さを教えてくれるすごいものに見えてきました。「百聞は一見にしかず」といいますが、図書室の本やテレビなどでの映像よりも、そこにあった実際に戦争の傷を負った資料や無声の映像は、戦争の残酷さを強く訴え、今も私の心を強く締め付けています。戦争の事を知れば知るほど人の命の尊さを考えさせられ、現在も核兵器を持ち、造り続けている国があることが残念でなりません。

私たちは「戦争が終わって五十五年たつ」と思っていますが、被爆者の人たちにとっての戦争は、まだ終わっていません。「戦争」という行為が終わったにすぎないのです。五十五年たった今でさえ、たくさんの被爆者たちは核兵器がもたらした数十年にわたる障害と戦い続けています。私たちは、これから先もずっと戦争という過去の過ちから目を背けずに、たくさんの人が戦争の悲惨さを学び、次世代へと伝えていくべきです。

五十五年前のあの日から「ヒロシマ」は言い尽くせない努力によって、今の緑あふれる「広島」をつくり上げました。今度は世界の努力で内戦や紛争をやめ、核を無くし、世界中の人々が安心して過ごせる日を一日も早く迎えなければなりません。

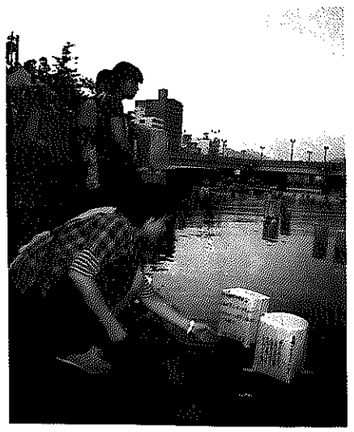
私は三日間の貴重な体験を基に、戦争の真の恐ろしさを一人でも多くの人に伝えたいです。そして、今まで以上に命の大切さを理解し合い、恒久平和を深く考えていきたいです。

平和を願う中で

白根第一中学校　長﨑朗子

私はこの研修に参加する前に、少しでも戦争について深く学べるように、たくさんの本や写真、資料などを見て学習しました。そして実際に広島に行き、事前に読んだ本や写真に出てくる場所を現場で見たとき、全身鳥肌が立ち、言葉を失ってしまいました。あらゆる所に五十五年前の地獄の様子が思い浮かばれ、そのたびに涙がにじみ、胸が詰まってしまいました。

この広島での三日間、私は数え切れないくらいに貴重な体験をし、いろいろなことを感じ、学んできました。その中で最も強く印象に残っていることは、灯ろう流しをし終えたときのことでした。平和を願う色とりどりの灯ろうが流れる橋の上は、多くの人で混雑していました。そこに白髪のおばあさんが一人いて、辺りの人々に怒りをぶつけるかのように、大声で叫んでいました。そのおばあさんの顔や手にはやけどの跡があり、私は被爆者だと直感しました。「今、平和を願って私たちがやっている灯ろう流しや平和を合言葉に行う行事は、被爆者の人たちにとって、つらい日々を思い出させることになるのではないのだろうか」と気づきました。私たちが訪ねた被爆者の松原さんが言った「戦争は五十五年前に終わったけれど、私たち被爆者の戦争は、今もなお続いているんです」という言葉が、とても悲しく重く心に残っています。



広島のあらゆる所で目に入る「平和」という言葉は、その地域の人々はもちろんのこと、世界人類が共通して願うことだと思います。今、私たちの生活は便利で豊かになりました。しかし、これが幸せで平和ということなのでしょうか。なぜ、平和を願う一方で、何の意味を持っていまだに核が存在するのでしょうか。この広島派遣で、私は言い切れないほどのたくさんの体験をし、戦争の悲惨さ、人の命の尊さ、そしてこれからの未来の在り方を学ぶことができたと思います。

「安らかに眠ってください。過ちは二度と繰り返しませんから」この言葉を、戦争で亡くなった人たちと固く誓っていかなくてはならないと、今、強く思っています。